

屋久島のエコツーリズム：木の芽流しの雨の季節に

屋久島は樹齢 1,000 年以上にも及ぶ「屋久杉」で有名であり、さらにその地理的位置及び最大標高差約 2,000m という地形的条件から、亜熱帯の照葉樹林帯から針葉樹林帯、山頂部の高山植物帯と植生の多様な垂直分布が見られる。1993 年にはユネスコの世界遺産に登録された。また、島の周囲は日本で最も海水魚の種類が豊富な場所としても知られている。この多様で貴重な自然に惹かれて、島を訪れる観光客は年間 15 万～20 万人にのぼるとみられている。

しかし、観光客の増加に伴って、観光施設を造るために自然の一部を破壊したり、また観光客の捨てるごみの増加や、さらに排泄物による水質汚染も問題になってきている。そこで島民の間から、観光を島の産業として育てたいが、それによってかけがえのない島の自然を壊したくない、という意識が起こってきた。屋久島の貴重な自然資源を保全しながら、住民の生活維持向上も同時に図るために導入されたのが「エコツーリズム」の考え方である。

従来の「観光」はいささか乱暴に言ってしまうえば、いわゆる「観光スポット」と呼ばれる所へ行って風景や建物を眺め、買い物をして駆け足で帰っていく。そこには観光地へ行ったという事実、お土産物を買ったという事実しか残らない。「エコツーリズム」とは、その土地の自然や生活文化を傷めることなく持続させていくことを配慮しながら、その素晴らしさをより深く体験し、楽しむ観光で、自然保護と観光を融合させたものである、といえる。

このエコツーリズムは中米のコスタリカが発祥の地と言われている。そこでは自然保護地域周辺の農民たちが、地域の持つ自然資源を持続可能な方法で維持しながら、住民の雇用機会を増やし、生活水準の向上をめざしている。途上国におけるバランスのとれた開発と環境保全や、日本の過疎地域における村おこし等を考える際に重要なヒントを与えてくれる。

ただ、今回屋久島を訪れているいろいろな人々の話を聞き、実際に屋久杉樹林帯を歩くエコツアーにも参加してみたが、エコツーリズムを成立させ、うまく維持していくためには、もちろん観光客をひきつける「自然資源」が必須であるが、それだけではなく、それを支えるソフトの部分、例えばツアーの受入れ体制の整備、ツアー自体の中身の吟味、ツアーのガイドの資格認定やその資質の向上、等々もエコツーリズムの成否を握る大きな要因であると感じた。 (屋久島にて：湖東)



霧と苔につつまれた屋久杉林の中



屋久島の照葉樹林帯